

中国近代思想研究方法序説（三）

川 尻 文 彦

本稿は前々稿「中国近代思想研究方法序説（二）」（『国際文化研究科論集』愛知県立大学大学院、二〇一八年、第十九号）、前稿「中国近代思想研究方法序説（二）」（『国際文化研究科論集』愛知県立大学大学院、二〇一九年、第二〇号）を引き継ぎ、中国近代思想研究に当たって問題となりうる研究方法上の論点に言及する。前々稿、前稿では「西洋の衝撃」論や「洋務・変法・革命」論に、あるいは「西学」の受容史による中国近代思想の叙述を拒絶し、また中国伝統の再解釈によって「西学」の受容をはかる「付会」論による中国近代思想理解についても疑問を呈した。またマルクス主義史観や近代化論による中国近代理解が一面的であることは言うまでもないであろう。では私たちにとってどのような中国近代思想の叙述方法がありえるのであろうか。以下で試論的に述べたい。

一 「思想連鎖」の視点

近年、中国近代思想研究において「思想連鎖」の語がよく聞かれるようになった。「思想連鎖」はおそらく人文社会系の学問においてはそれほど見慣れた用語ではなく、より狭くアジア史研究においてさえもあまり見かけることはない。補足説明が必要であろう。この場合の「思想連鎖」の語が含意するものは、近代における中国と日本の間の思

想の連鎖のことであり、書物や学問や知識が東シナ海を行き来する様子を想像している。坂元ひろ子は譚嗣同や章炳麟など近代中国の思想家について論じた著書の冒頭で次のように言う。「初期グローバル化の時代にめぐりあわせた知識人たちは……たいていは宣教師あるいは明治維新で近代化をはかった日本でのいわば「日式受容」を介してであれ、未曾有の規模で異文化、とりわけ近代西欧文化に向き合うことになった。そうした刺激、緊張をともなう思想的営為のなかでこそ、中国近代の「知」というものが多様なかたちで錬成されたし、それは形成途上の民族国家規模においても、またそれをこえ、アジア規模、ほぼ同時代的にいえば、いわゆる西欧近代が発現ものとひとつとなつた世界規模での思想的連鎖のなかでこそなしたといえる」¹⁾。

この「思想連鎖」をはじめて学問的方法論として論じたのは、坂元ひろ子が言うように明治法制官僚の研究で知られた山室信一である。山室信一は一九九二年、ある政治思想研究者たちの論集に「知の回廊——近代世界における思想連鎖の「前提」という短い論文を発表した²⁾。同論文は学界における日本近代思想史研究の方法論の再検討を提言したものであった。山室信一は日本近代思想史研究の課題は「日本の近代とは何か」を解明することにあるとみなした。日本の近代を研究する視点としては、従来学界では、マルクス主義史学や近代化論などが有力であった。しかし、山室はそのいずれも採らない。山室は、日本の近代は何よりも欧米そしてアジアの諸国との交渉や交流といった関係性・相関性において初めて成立すると認識し、「思想連鎖」という視点を提案する。この思想連鎖とは山室信一の言葉によれば、メディアや交通の発達によって人と人、モノとモノ、情報と情報の無数の交流と伝達が国家という枠を超えて成り立ち、その循環過程の一環として思想が現れ、世界的規模で流通していった。これが「思想連鎖」による「知の回廊」である。この論文から山室の意図として私が見て取れるのは、あくまでも日本近代を理解するための方法としての「思想連鎖」であり「知の回廊」であった。ここには国民国家的思想史叙述を回避するという山室の意図が確固として存在する。当時、社会主義のソ連邦の解体という状況下で国民国家論が論壇、学界でさかんに論じられていたことが想起される。

山室信一がアジアにおける「思想連鎖」「知の回廊」をたどる過程で従来は忘れ去られていた明治日本の学術や研究を再評価したことも彼のもうひとつの功績として指摘できる。明治日本の学術や研究が中国や朝鮮に波及していったのである。中国近代思想研究の文脈に即して論じるならば、例えば、古くは『章炳麟集——清末の民族革命思想』（西順蔵・近藤邦康編訳、岩波文庫、一九九〇年）はきわめて難解な章炳麟の文章を一九七〇年代の仕事（西順蔵・島田虔次編『清末民国初政治評論集』筑摩書房、一九七一年、西順蔵編『原典中国近代思想史』第三冊、岩波書店、一九七七年）を土台にしながら苦心して日本語訳した労作であった。さらに訳注も充実しており、章炳麟が引用した難解な中国古典の原典についても訳者たちは詳しい解説を付している。同時に明治日本の学者たちの文献の断片的な引用についても調査が行き届いていた。今日忘れられていた岸本能武太や姉崎正治の名も見える。しかし、社会学者、宗教学者、哲学者としての彼らに着目する研究者（私を含め）はこの一九九〇年当時、少なかつた。なぜなら今日の研究水準から言えば、明治の学者の議論は所詮、「埃をかぶつた」「参照価値のない」ものであったからである。いわば無意味な「骨董」として図書館に埋もれていたのである。山室信一の仕事は結果的に「思想連鎖」の「知の回廊」の中でそれらの明治の学術に再び光を当てることになった。そのことの中国近代思想研究の方法への刺激は計り知れない（一方、山室のホームグラウンドである日本研究者たちへの反響は寡聞にして知らない）。

ただし、山室信一の視点は次第に日本研究の土台・ホームグラウンドを離れ、拡大し、変化していったと私は見る。山室自身が「変質」したのである。山室はその後、「思想連鎖」に関する多くの論稿を発表し、一冊の本『思想課題としてのアジア』（岩波書店、二〇〇一年）にまとめる過程ではじめて「空間アジア」を提唱した。山室はまさに超人的な史料の「博搜」を行い「空間アジア」という場における「知の連鎖」の解明に取り組んだ。従来、明治日本の西洋に関する学問が清末中国への伝播に言及した研究はなくなかった。二〇世紀初頭に増加した中国人留学生や亡命思想家たちの研究などの研究である。しかし、それはあくまでも日本から中国への「一方通行」の思想の「伝播」をたどったものに過ぎなかつたり、種本探しに過ぎなかつた。山室信一の研究はそれらとは質的に異なり、「知

の回廊「思想連鎖」によって「空間アジア」という場が形成されてきたことを思想的に実証しようとしたものである。山室の著書は、あまりにも大部で、膨大で精緻な史料提示が説得力を増しているように見えると同時に大量の史料提示に幻惑されて、山室の意図が正確に理解されているとは言いがたいように思われる。しかし、山室の一連の仕事は、中国研究の学界に対する研究方法論の提言として大きな影響力があった。その後多くの研究の先例となっていた。³近代中国の思想、文学、歴史を研究する際に明治日本を参照するという研究モデルを提示することになったのである。ここでは山室が提案する「知の回廊」「思想連鎖」「空間アジア」等の学問的な概念、方法論の意義を一旦は承認しておきたい。

二 国際的な思想史

山室の提示した国家や国民を越える「空間」から「思想連鎖」を捉える視点について近年、欧米の学界からも示唆に富む研究方法上の提案がある。それは、アメリカの思想史家、歴史家デイヴィッド・アーミティージ (David Armitage) が提唱する「思想史における国際論的展開」(The international turn in intellectual history) である。⁴

アーミティージはいわゆるスキナーやジョン・ダンに代表されるケンブリッジ学派のコンテクスト主義⁵を継承しながらも、批判的に乗り越えようとする。周知の通り、スキナーは『思想史とはなにか——意味とコンテクスト』⁶の中でラヴジョイの観念史を厳しく批判した。その批判の主たる論点は、一見同じ思想の反復に見えても、原義の解体と語義の確定の必要に迫られて、別個の概念を形成したものであって、時間や空間を超越したより広範囲にわたる叙述に同化したわけではないということである。例えば、ブリテンにおける自由主義はインドにおける自由主義と同じではないのである。アーミティージによれば、コンテクスト主義をとる政治思想史家たちは、ラヴジョイ批判を強く意識していたため、国内統治に関する国家論の歴史に関心を寄せることになり、国家の内政ばかりを論じ、諸国家の対外関

係をますます軽視するようになった。スキナーは『近代政治思想の基礎』(The foundations of modern political thought)の末尾で、十七世紀のはじめに、国家概念は、ヨーロッパの政治思想における最も重要な対象とみなされるようになったと述べる。⁽⁷⁾ スキナーらの試みは、政治思想史研究を活性化することに成功したが、これと近接する国際的な思想史(international intellectual history)に対する関心はもたなかった。結果として、スキナーのコンテクスト主義は国民国家的思想史を強化することにつながったとアーミティジは厳しく批判する。スキナーらの政治思想研究がナシヨナリズムに対して批判的に検討する態度を崩さなかったことを考えると逆説的である。例えば、ジョン・ダンはある著書で「ナシヨナリズムは、二十世紀の政治的恥辱の極致である」から語り始める。⁽⁸⁾

しかし、一九九〇年代半ばになるといわゆるグローバル・ヒストリーの潮流が学界に登場する。欧米の学界を風靡した歴史叙述における国際論的転回(international turn)は、国際的な思想史に無関心だった思想史家に再考を促すものとなった。⁽⁹⁾ 国際論的転回を主張する歴史家の多くは、資本、帝国、移民などを主たる研究対象にする経済史の研究者であり、思想史家によってこのような取り組みがなされることはなかったのである。アーミティジによれば、国際的な思想史の研究分野の一つは、扱う領域を拡げ、テキストや理念や思想家が、国境の内外に、大洋を越えて、流通し、伝達し、受容していった軌跡を追究する。国際論的転回は、国民や国家よりも大きな領域に対する関心を引きつけて、空間という概念への関心を呼び起こした。それは、政治的な国境に閉じ込められず、トランスナショナルな繋がりと流通によって結びつくものである。諸帝国は、統合と分離を同時に進行させながら、概念上の統合を促し、通商ルート沿いに、離散した諸人民への思想の流通を支援した。アーミティジの精彩に富んだ比喻によれば、継ぎ目のない網の目状になった抽象的な知識はもろもろの偶然的関心からなるもろい寄せ木細工である。国際的な思想史の目的の一つは、知識の断片がいかに蓄積され蒐集されたか、そしてその信頼性がいかに獲得されたのかを明らかにするのである。知識が特定の場所できかに作られるかだけでなく、知識の交換がいかにさまざまな場所の間で起こるか、ということも理解する必要がある。すなわちどのように思想は旅をし、誰がそれを運び、その旅ではどんな荷

物を持ち運び、そして到着したとたんに、どう飼いや慣らされて土着化したか、ということである。空間概念が広がる、重要な網の目が拡散し、交換のネットワークが増大して、新たなコンテキストとコンテキスト間の予期しない連関がつくられる。部屋と建物、通りと広場、都市と地域、国と大陸、帝国と大洋などにおける、社会的結合関係と通信、書籍の流通と知識の空間的組織化の変遷によって、思想家は思想の受け取り手の性質、論拠の潜在的な影響力、行動範囲の再考を余儀なくされる。空間概念の変化は思想のコンテキストを拡張、それとともに、思考の可能性そのものをも拡張した。歴史学が国民国家の付属物として制度化される以前の思想史自体のコスモポリタンのルーツにまで遡ることになるであろう。

清朝史家のパミラ・カイル・クロスリーは著書『グローバル・ヒストリーとは何か』の中で次のように言っている。グローバル・ヒストリーが自ら課した難問は、いかに中心をもたずに歴史を語るかということである。それが可能か否かは確実ではない。グローバル・ヒストリーという装置の究極の形は、それが実現されるなら、テキストでも、物語でも、分析概念でもなく、むしろコンテキストを紡ぎだすものによってであろう。ただし、言語とナラティブは文法や語彙、時間観念の一方方向性という限界を越えることはできず、形式と内容が整合する時期はまだ到来していない。グローバル史家の取り組みはつねに宙づりのままである¹⁾。

さて、アーミティジはホップズ、ロック、バーク、ベンサム思想や『独立宣言』の精神が国境や大洋を越えて伝播していった過程を実証した。また東アジアにおいてヘンリー・ホイートンの『万国公法』（一八三六年）が広く読まれたことを紹介し、その研究発展性について言及している。しかし、アーミティジの「空間論的転回」の提言は非常に示唆に富むが、「試論」の域を出ていない。彼自身は西洋語以外の外国語史料を使っておらず、パミラ・カイル・クロスリーのいう「コンテキストを紡ぎだす」ようなグローバル・ヒストリーを真に実践できているとは現時点ではいえないであろう。西洋とは何か、東洋とは何か、西洋と東洋はいかに交わるのか、これらはグローバル・ヒストリーにとっても避けて通ることのできない課題であり続けている。

三 日本中心主義、西洋vs東洋を越えて

上述のように山室信一は『思想課題としてのアジア』の中で「空間アジア」を提唱した。山室信一は「本書を『思想課題としてのアジア』と題したのは、アジアという空間が思想の課題として立ちほだかっているということと、なによりもそうした問いを、可能な限り根源的な地点まで問い続けることが思想的の課題であるという意味を込めたものである」（Ⅷ頁）と述べる。「アジアという空間」を思想課題として提起し、それを思想史研究の立場から「歴史の現場」を「根源的」に問い直す必要性を強調した。山室信一は「空間アジア」における「知の回廊」「思想連鎖」等の方法論を提示し、単純な「西学」受容史によって日本・中国・韓国の思想史を描くことを拒否したのである。その点は私の研究動機と共通する。しかし、山室の研究に対しては方法的にいくつかの課題が存在するように思われる。それを探る手がかりとして、「第三者」である外国人学者の見解を参照してみたい。例えば、台湾学者の黄俊傑は山室の同書に対して専論を発表し、批判を加えている。黄俊傑によれば、山室の研究の特色は、「日本から考える」と「近代から考える」の二点に要約することができる¹³。「日本から考える」とは日本中心主義のことであり、「近代から考える」とは「近代性」という切り口からアジアを分析しているということである。そのときの「近代性」とは黄俊傑が見るには「日本の近代性」と同義であり、つまり山室は「日本の近代性」が「空間アジア」へ広がっていくイメージを強調している。山室本人も自覚しているように（また慎重に回避しようとしたにもかかわらず）やはり日本中心主義をまぬかれていない。引用されている史料が日本語文献に偏っていることは一目瞭然である（一人の学者にあらゆる外国語に精通することを要求することはできないことは私も承知している）。安田敏朗の一連の研究が指摘するように、日本語史料のみを追っていることによる研究の盲点が存在する。日露戦争後、日本は韓国を支配下におき、中国東北部への進出の足がかりを築き、必然的に東アジアにおける日本語の本の流通が激増した。研究者が意図するしなやかかわらず、日本語史料による研究はコロナアル的な研究にならざるをえないのであ

る。となると山室のいう「知の回廊」はけっしてニュートラルなものではなく、日本的な「近代性」の「回廊」にならざるをえないであろう。緒形康は山室の引用文献が圧倒的に日本語のものに偏っており、日本的「アジア主義」に陥る一歩手前のある種の「イデオロギー性」を有していると断言する¹⁵。山室の研究は細かいディテールが多く、博搜の極みである。しかし、上述の史料的な制約によって中国や韓国などについては表面的な分析に終始し、山室のいう「思想水脈」にまで接近できていない。例えば、『万国公法』については『万国公法』の出版や流通は跡づけできているが、中国の知識人の世界観や国際認識に触れられることは少ない。またより抽象的な文明や自由などの認識についてもそうである。山室の本をいくら読んでも、中国における「文明」観、「西洋文明」観などはその像がいつこうに見えるてこないのである。また山室のいう「知の回廊」「思想連鎖」が時期的にはいつからいつまでを想定しているのか、はつきりしない。山室書を一覧する限り第一次世界大戦以前までを分析の対象にしているようにみえる。私がなぜこのようなことを言うのかといえば、梁啓超らは二十一か条要求の後に「東学」への言及を避けるようになったとされている¹⁶。中国における対日感情の悪化がその背後にある。その一方で、村田雄二郎が指摘するように、二十一か条要求後に、「西洋の没落」論、新文化運動、デュイイ、ラッセルの来華などある種の思想解放があったことも事実である¹⁷。山室の「知の回廊」「思想連鎖」はそのあたりをどのように説明するのであろうか。山室において社会主義が取り上げられてはいないのはそのあたりの事情があるのではないだろうか。社会主義についてはその「思想連鎖」を二十世紀初頭から少なくとも二十一か条要求後の一九二〇年代まで幅広くとらえる必要があるからである。

四 社会主義の問題——「ロシアの衝撃」か？

以上のような国際論的な思想史の問題意識を共有した際、恰好のケース・スタディになるのは社会主義をめぐる問題である。ここでは社会主義のグローバル・ヒストリーという観点から中国近代思想における社会主義について論じ

る。中国における社会主義理論の紹介は清末に始まるが、その画期は一九二二年、上海における中国共産党の成立にあるだろう。中国は中国共産党が指導する国家でありつづけており、いまなお社会主義の看板を降ろしていない。中国共産党の公式見解が示すように、中国共産党の成立に至る過程で、「南陳北李」(南の陳独秀、北の李大釗)の主導のもとで共産党の組織化が行われたと素朴に信じる人はいないであろう。ヴォイチンスキー(Grigori Nannovich Voitinsky、一八九三〜一九五六)やマーリン(本名ヘンドリクス・スネーフリート Hendricus Sneevliet、一八八三〜一九四二)などロシア共産党の顧問の働きかけが大きな役割を果たし、その後には中国、日本、朝鮮における共産党設立にかけるロシア共産党の努力があつたことは事実である¹⁸⁾。同三国の共産党がそろって一九二〇年代に成立しているのは偶然の一致ではない。そのため中国におけるマルクス主義の受容の問題を考える際に、国際共産主義の国際的契機を重視するのは研究の方向性としては正しいだろう。当然、ロシア方面の史料の活用が必須になるであろう。このことは以前から言われていたことだが、実際にロシア語史料を使って論文を書くことができる研究者は、ごく少数に限られるのが現状である¹⁹⁾。

ここでは、アーミティージが『アメリカ独立宣言』の国際的な思想史を構想していたひそみにならぬ²⁰⁾、私は『共産党宣言』の国際的な思想史を先行研究に依拠しながら論点の交通整理を試みたい。『共産党宣言』は「今日までのあらゆる社会の歴史は階級闘争の歴史である」から始まる。階級闘争におけるプロレタリアートの役割を明らかにしたマルクス主義の基本文献である。マルクス(一八一八〜八三)とエンゲルス(一八二〇〜九五)が一八四七年に起草し、翌年の二月革命直前に発表してからあらゆるプロレタリア運動の指針となった歴史的文書である。日本では『共産党宣言』は、明治三十七年(一九〇四年)十一月十三日の『平民新聞』第五十三号にはじめて訳載(ただし第三章は未訳)された。訳者は堺利彦(枯川)と幸徳伝次郎(秋水)である。『平民新聞』の一周年記念によるものであった。しかし、『共産党宣言』を載せた『平民新聞』は発禁処分となった。明治三十九年(一九〇六年)三月に堺利彦は月刊雑誌『社会主義研究』第一号に『共産党宣言』を掲載した。これが本邦初の全訳であった。この雑誌そのもの

は発禁処分にはならなかった。明治四十三年に幸徳秋水による大逆事件が起こってからは『共産党宣言』は発禁扱いとなった。社会主義に関する文献の出版は制約が大きくなった。⁽²⁾

一九二〇年初め、コミンテルン執行委員会極東書記処はヴォイチンスキーを団長とする活動家グループを中国に派遣した。彼らは北京に到着してから李大釗ら中国の初期マルクス主義者たちと共通の言葉を見つけ出し、彼らと実務的な関係を結ぶのに成功した。その後、陳独秀らのいた上海に移り、マルクス主義の立場に転じたばかりの革命的な知識人との接触を図った。彼らは知識人の小サークルを結成しているに過ぎず、労働者とは没交渉で、共産主義運動への見通しを持っていたとはいえなかった。ロシアの伝記作家の言を借りれば、ヴォイチンスキーらが中国に到着するまで、共産党の創立が遅かれ早かれ不可避であるという状況にあつたにもかかわらず、とりわけ権威をもっていた李大釗や陳独秀を含め、中国のマルクス主義者のなかで誰ひとりとしてこの問題を実地的な見地から提起していなかった。中国においてプロレタリアートの政党を作ること、まったくのところ、コミンテルンのイニシアティブで行われたのである。⁽³⁾

一九一九年にはいるとマルクス主義を研究する学生組織が結成され、マルクス主義関連の文献の紹介が堰を切って行われ始めた。そのなかでも李大釗の「我的馬克思主義観」(私のマルクス主義観) ははじめてマルクス主義の理論を中国に体系的に紹介した文献として高く評価されてきた。⁽⁴⁾『新青年』に二回に分けて連載され、「我的馬克思主義観(上)」は『新青年』第六卷第五号(発行日付は一九一九年五月)、「我的馬克思主義観(下)」は『新青年』第六卷第六号(発行日付は一九一九年十一月一日)に掲載された。『新青年』の実際の発行日についてはややこしい議論があり、実際の発行は印刷された日付より遅れたとされる。さて『共産党宣言』はこの頃には中国の知識人の間で読み始められていたが、中国語訳全訳の刊行は、一九二〇年出版の陳望道訳によってである。陳望道(一八九一〜一九七七)は言語学者、初期の共産党員で、日本に留学、帰国後浙江省第一師範の語文教師となり、国語・文字改革の主張で知られる。この陳望道訳『共産党宣言』の底本をめぐっては二説が存在している。⁽⁵⁾ 幸徳秋水と堺利彦による日本語

訳（一九〇四年、一九〇六年）に依拠したとする説と主たる底本はこの日本語訳だが英語訳もある一定程度参照したとする説が対立している。前者を代表する研究者は石川禎浩と陳力衛であり、後者は北京・中央編訳局の公式見解であるようである。²⁷⁾ まず後者について言えば、『社会主義研究』（第一号）に掲載された幸徳・堺訳を底本にししながら、陳独秀が北京大学から借り出し、陳望道に貸した英訳本も参照したとされる。これに対し、石川禎浩は、陳望道の翻訳底本は上述の日本語訳であり、英語訳は「参照した形跡は見出しがたい」としていた。²⁸⁾

大村泉は『共産党宣言』の前書きの最後の段落に出てくる

英訳 Danish 幸徳・堺訳 和蘭 陳望道訳 丹麥

を例に挙げ、Danishを和蘭と訳したのはあきらかに幸徳・堺の誤訳であるが、陳望道はこれを正確に丹麥（デンマーク）と訳している。英訳を参照しないでこうした改訳を試みるのは不可能であり、このような例はほかにも多数あるとして、陳望道訳『共産党宣言』は日訳を底本に英訳を適宜参照しながら成立したと結論づける。つまり石川、陳力衛説は失当であるとする。大村泉によれば、「石川は『颯風』二七号所収の論考を本書『中国共産党成立史』（岩波書店、二〇〇一年）に収録する際、断定した表現をいくぶん緩和しているが、論拠を何も示していない。事柄が事実関係に関わる以上、旧説の当否を明確にすべきであった」³⁰⁾。これは石川禎浩が『中国共産党成立史』において「陳望道自身の回想も英語に触れていないので、どの程度それを参考にしたのかは不明である」（石川五九頁）と述べながら「基本的に」（石川六一頁）は英訳を参照しなかったと自説を修正していることを指している。中国におけるマルクス主義の「ロシアの衝撃」を強調する石川が、『共産党宣言』に限っては「日本要素」に執着していることは興味深い。国際論的な思想史の醍醐味といえよう。

一方、陳力衛は翻訳版本問題では石川説を踏襲しながら、陳望道訳以降の多数の中国語訳『共産党宣言』を対比し、一九四九年以降中国国内で刊行された翻訳では「国民、国家」に代えて「民族」「祖国」の訳語が、また陳訳には存在しない箇所「暴力」の文字が用いられるなど、訳語訳文に「先鋭化」の傾向が見られ、これを通して階級矛盾

盾を強調し、階級意識を高め、革命と暴力の選択を合理化するようになっていくと結論づけている。陳力衛がいうのは、『共産党宣言』の中国語訳は時代を追うことに「暴力」的な翻訳になっている。この指摘は示唆に富むが、ドイツ語版『共産党宣言』の検討に基づいた大村泉による反論が存在する。日・中・英訳を比較対照した興味深い事例があるので、紹介する³⁾。

堺・幸徳訳（一九〇六年）

此戦争が破裂して公然の革命と成るの點に及び、又紳士層が顛覆せられて平民の権力の基礎を作るの點に及ぶ。

陳望道訳（一九二〇年）

爆發起来，成了公然的革命，推倒有産階級，築起無産階級權力的基礎。

最新版（二〇〇五年）

直到這個戰爭暴發為公開的革命，無産階級用暴力推翻資産階級而建立自己的統治。

ドイツ語原文

wo er eine offene Revolution ausbricht und durch den gewaltsamen Sturz der Bourgeoisie das Proletariat seine Herrschaft begründet.

英訳

where that war breaks out into open revolution, and where the violent overthrow of the bourgeoisie lays the foundation for the sway of the proletariat.

これを見ると堺・幸徳訳にも陳望道訳にも暴力の語が見えない。二〇〇五年版の中国語訳には暴力の語が見える。それはなぜか。大村泉が言うには、ドイツ語の原文に、*gewaltsamen*（暴力的）の語があるからであり、二〇〇五年版がおそらくドイツ語原文に忠実に翻訳したからである。となると陳力衛の分析は必ずしも適切ではないということになるであろう。なお英訳には *violent* の語があるものの、堺・幸徳訳、陳望道訳ともに反映されていないように

ある。³²⁾

五 革命史観の「復活」？

さて再び話を中国近代思想の研究に戻す。ここまで一九二一年の中国共産党の成立に至る過程で国際的な契機つまり一九二〇年以降のコミンテルンの「斡旋」を重視する研究傾向について紹介した。しかし、清末以降を扱う中国近代思想の研究にあつて、かつては社会主義の伝播、受容、発展の観点からのアプローチが主流であつた。中国近代思想の展開はどのようにして一九二一年の中国共産党の成立へと帰結したのか。今日、このような問いかけをする学者は少ない。しかし、ながらく京都学派を代表する学者であつた狭間直樹の主著であつた『中国社会主義の黎明』（岩波新書、一九七六年）は清末の革命派と改良派の論戦を扱つたものだが、そのタイトルが端的に示すように、孫文らの革命派を中心とした清末思想が、社会主義思想を受容しながら、中国共産党の成立、中国共産党の勝利、中華人民共和国の成立へと展開していくさまを当時の史料の限界はあるものの豊富な実証をまじえながらも単線的に描く。朱執信ら革命派を中心とした当時の知識人の『共産党宣言』理解を断片的な言及を含め、丁寧を追っている。³³⁾

狭間直樹と近い世代の近藤邦康はかつて章炳麟、李大釗、毛沢東のそれぞれの思想研究を手がけたが、それは魯迅が示唆したように革命派の主将であつた章炳麟の思索がどのように毛沢東へとつながつていったのかといった関心に集約されていったようにみえる。つまり清末の革命派の思想をどう評価するかという課題設定は、中国共産党が支配する中国や毛沢東評価の問題と直結していたのである。ここには中国近代思想史を一九二〇年で断絶する「ロシアの衝撃」史観は存在しない。

李大釗についての先駆的な研究を行ったアメリカ人学者のM・メイスナーによれば、李大釗の著作は、最も先鋭な革命理論であるマルクス主義の主意主義的（ヴォランタリスティック）な解釈と戦闘的な民族主義（ナシヨナリズム

ム)の結合を示しており、李大釗のマルクス主義学説の解釈はその後のすべての中国共産主義指導者の思想と行動に深い影響を与えた。⁽³⁵⁾ その主意主義的傾向は、李大釗の日本留学時期の著作「新生」「青春」から生涯を通じて一貫したものと描いている。

これらのことさらに古い研究を持ち出したのは、中国における社会主義の研究において清末と民国初の「断絶」状況を打破できないかという思いが私にはあるからである。それは日本近代思想の領域において、いわゆる明治の社会主義とコミュニケーション(第三インター)成立以降の社会主義の「連続性」と「不連続」をどう捉えるかが学問的な課題として取り上げられるようになって久しい研究状況を念頭においている。⁽³⁶⁾ 中国において共産党や社会党を名乗る団体は、中国共産党成立の一九二一年以前にも存在したことは研究者の常識に属する。⁽³⁷⁾ そのことは逆から言えば、一九二一年に設立された団体のみがコミュニケーションによって「共産党」として認知されたということを意味する。だからといって、コミュニケーションに認知される以前の社会主義をめぐる中国知識人の思想や行動に関して検討を加えることの重要性が減じることはない。

清末の社会主義は時期的にも、思想内容的にも明治の社会主義と重なる。そのため日中間の「思想連鎖」の視点が重視されなくてはならないだろう。清末中国の知識人の思想の背後には明治の社会主義の痕跡が見え隠れする。中国研究の立場からは日本近代思想研究の諸成果や新史料を利用し、より細かい議論を展開しなくてはならない。⁽³⁸⁾ 日本との連鎖だけではなく、国際的な契機に着目する研究も存在する。清末時期の孫文の社会主義を扱った研究であれば、これまでは孫文のその後の革命戦略や『三民主義』から遡及し、民生主義として一括されることが通例であった。ところが、孫文を社会主義者として捉え彼の社会主義理論について生涯を通じた分析を加えたものや、⁽³⁹⁾ 欧米の経済学理論との影響関係に言及した研究が現れている。⁽⁴⁰⁾

マルクス主義転向前の李大釗であれば、その「転向」直前の思想的背景を探るためにも、彼のいわゆる「新旧調和論」に着目すべきである。⁽⁴¹⁾ また彼のロシア革命等のヨーロッパ政治理解についても検討が必要になるであろう。彼が

『中央公論』など日本の政論誌を最新のヨーロッパ情勢に関する知的情報源にしていたことは周知である。いずれにせよ第一次世界大戦、ロシア革命の中国、日本への衝撃を丁寧⁴²に洗う必要がある。「ロシアの衝撃」によってロシア革命モデルが、中国知識人によって全面的に承認され、「ロシアの道を歩む」ことが当時の中国の知識界の共通の了解になったわけではなく、その後もおりに触れてさまざまな論戦が行われたからである⁴³。

欧米の学界における東アジアにおける社会主義、マルクス主義についての研究にも注意を払う必要があるだろう⁴⁴。その成果の一部については日本でも紹介されつつある。私たちは国際的な東アジアにおける社会主義研究と協働できるであろうか。

本稿では紙幅の関係上、粗雑な研究動向の整理と研究方向の提示だけにとどまった。本稿で示唆した方向での具体的な実証研究は今後に期したいと考えている。

注

- (1) 坂元ひろ子『連鎖する中国近代の“知”』（研文出版、二〇〇九年）一頁。
- (2) 山室信一「知の回廊——近代世界における思想連鎖の「前提」」（小野紀明ほか『近代日本の意味を問う——政治思想史の再発見 二』木鐸社、一九九二年）。
- (3) 狭間直樹編『梁啓超』（みすず書房、一九九九年）にもその影響がはつきり見て取れる。
- (4) デイヴィッド・アーミティージ（平田雅博・山田園子・細川道久・岡本慎平訳）『思想のグローバル・ヒストリー——ホップズから独立宣言まで』（法政大学出版局、二〇一五年）。David Armitage, *Foundations of modern international thought*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- (5) スキナーおよびスキナーのコンテクスト主義についてはこれまでさまざまに論じられてきた。それらの研究史上の回顧と総括を行ったものに、関口正司「クエンティン・スキナーの政治思想史論をふりかえる」（『法政研究』第八一卷第四号、九州大学法政学会、二〇一五年）がある。

- (6) クエンティン・スキナー (半澤孝磨・加藤節編訳) 『思想史とはなにか』(岩波書店、一九九〇年)。原書は *Meaning and context: Quentin Skinner and his critics* / edited and introduced by James Tully, Cambridge: Polity, 1988.
- (7) クエンティン・スキナー (門間都喜郎訳) 『近代政治思想の基礎——ルネッサンス、宗教改革の時代』(春風社、二〇〇九年) 六二九頁。Quentin Skinner, *The foundations of modern political thought*, Cambridge: Cambridge University Press, 1978.
- (8) ジョン・ダン 「第三章 ナショナリズム」(同『政治思想の未来』みすず書房、一九八三年) 八四頁。
- (9) 英語圏の中国研究におけるグローバル・ヒストリーへの傾斜については、秦玲子「英語圏の東アジア科挙官僚制研究史」(アレクサンダー・ウッドサイド(秦玲子・古田元夫監訳)『ロストモダンティーズ——中国・ベトナム・朝鮮の科挙官僚制と現代世界』N T T出版、二〇一三年)で紹介されている。中国内在地なアプローチを提唱したP・A・コーエンは *Discovering history in China: American historical writing on the recent Chinese past* の第二版(二〇一〇年)の序(Introduction to the 2010 reissue)においてグローバル・ヒストリーへの安易な傾斜に対して懸念を示している。
- (10) K・ポメラント (川北稔監訳) 『大分岐——中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』(名古屋大学出版会、二〇一五年) 原書は Kenneth Pomeranz, *The great divergence: China, Europe, and the making of the modern world economy*, Princeton, N. J.: Princeton University Press, 2000) はグローバル・ヒストリーの代表作でもあるとともに中国研究者がグローバル・ヒストリーにいかなる貢献をすることが可能かを示すものであるが、日本人研究者の反応は総じて辛い(岸本美緒「グローバル・ヒストリー論と「カリフォルニア学派」『思想』第一二二七号、二〇一八年三月)。村上衛は『大分岐』に言及しつつ、日本の中国研究者の間でグローバル・ヒストリーが歓迎されなかつた要因について、同書の中国前近代経済に対する評価問題や中国経済史研究としての実証面での違和感や懐疑を挙げている(村上衛『大分岐』を越えて——K・ポメラントの議論をめぐって)『歴史学研究』第九四九号、二〇一六年十月)。
- (11) パミラ・カイル・クロスリー (佐藤彰一訳) 『グローバル・ヒストリーとは何か』(岩波書店、二〇一二年) 六七頁。
Pamela Kyle Crossley, *What is global history?*, Cambridge, U.K.: Polity, 2008.
- (12) 中国におけるアメリカ独立宣言を扱ったものとして、潘光哲『華盛頓在中国——制作「国父」』(三民書局、二〇〇六年)。
- (13) 黄俊傑『思想史視野中的東亞』(国立台湾大学出版中心、二〇一六年) 二〇四頁。

- (14) 安田敏朗『帝国日本の言語編制』(世織書房、一九九七年)。
- (15) 緒形康『思想課題としてのアジア』を讀む』(『中国——社会と文化』第二十号、二〇〇五年)一六〇—一七頁。
- (16) 川島真が利用可能な史料から精査したように、そもそも二十一か条要求に対する中国側の対応は未解明の部分が多い(川島真『二十一箇条要求と日中関係・再考——中国側の対応を中心に』同編『近代中国をめぐる国際政治——歴史のなかの日本政治』三)中央公論新社、二〇一四年)。
- (17) 村田雄二郎『日本の対華二カ条要求と五・四運動』(『岩波講座東アジア近現代通史第三卷 世界戦争と改造一九一〇年代』岩波書店、二〇一〇年)。
- (18) ユ・ヒョジョン(柳孝鐘)「コミンテルン極東書記局の成立過程」、『初期コミンテルンと東アジア』(不二出版、二〇〇七年)。
- (19) 中国語圏では李玉貞が代表的研究者であり、日本人学者ではおそらく片手で足りるであろう。
- (20) D・アーミテイジ著、平田雅博ほか訳『独立宣言の世界史』(ミネルヴァ書房、二〇一二年)。
- (21) 『共産党宣言』の日本語版については、橋本直樹『共産党宣言』普及史序説』(八潮社、二〇一六年)の第十三章「日本における『共産党宣言』の翻訳」影響史について」参照。
- (22) ソ連科学アカデミー極東研究所著、毛里和子・本庄比佐子共訳『中国革命とソ連の顧問たち』(日本国際問題研究所、一九七六年)一〇五—一〇六頁。
- (23) 斎藤道彦訳「李大釗「私のマルクス主義観(上)」「中国文学論叢」(第二号、桜美林大学、一九七〇年)、同「李大釗「私のマルクス主義観(下)」「中国文学論叢」(第三号、一九七二年)。李大釗「私のマルクス主義観(上)」が河上肇「マルクス主義の社会主義の理論体系」に依拠していることを考証した。「私のマルクス主義観(下)」については、後藤延子「李大釗とマルクス主義経済学」(『人文科学論集』二六号、信州大学、一九九二年)が、福田徳三『続経済学研究』(同文館、一九一三年)に依拠していることを指摘する。
- (24) 大村泉「日中両国における『共産党宣言』の受容」翻訳史概観』『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第四九号、二〇〇八年。
- (25) 石川禎浩「陳望道訳『共産党宣言』について」『颯風』二七号、一九九二年、同『中国共産党成立史』(岩波書店、二〇〇一

年)に収録。

- (26) 陳力衛(賀婷・解澤春訳)『「共産党宣言」の翻訳の問題——版本の変遷からみた訳語の先鋭化について』『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第四九号、二〇〇八年。
- (27) 季正聚(解澤春訳)『「共産党宣言」と中国』『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第四九号、二〇〇八年。
- (28) 石川禎浩「陳望道訳『共産党宣言』について」『颯風』二七号、一九九二年、六〇頁。
- (29) 大村泉、三〇頁。
- (30) 大村泉、三五頁。
- (31) 大村泉、三二頁。
- (32) 大村泉らの研究グループはいわゆる経済学部のマルクス経済学の講座に属する。日本におけるマルクス主義経済学の研究蓄積は膨大なものがあるものの、所属する学会や大学部局の違いもあつて歴史、思想史研究の研究者との交流は盛んとはいえない。あえて紙幅を費やして紹介した次第である。
- (33) 狭間直樹『中国社会主義の黎明』(岩波新書、一九七六年)一四一頁。
- (34) 近藤邦康『中国近代思想史研究』(勁草書房、一九八一年)、同『毛沢東——実践と思想』(岩波書店、二〇〇三年)。
- (35) M・メイスマー『中国マルクス主義の源流——李大釗の思想と生涯』(平凡社、一九七二年)一五頁。
- (36) 例えば、『初期社会主義研究』(一九八六年)を刊行している初期社会主義研究会(山泉進ら)などの活動。
- (37) 楊奎松・董士偉『海市蜃楼与大漠绿洲——中国近代社会主義思潮研究』(上海人民出版社、一九九一年)。
- (38) 川尻文彦「清末西学与明治日本——早期社会主義再考」黄愛平・黄興濤主編『西学与清代文化』(中華書局、二〇〇八年)。
- (39) 安藤久美子『孫文の社会主義思想——中国変革の道』(汲古書院、二〇一三年)。
- (40) 中村哲夫『孫文の経済学説論』(法律文化社、一九九九年)。
- (41) 李大釗の新旧調和論に言及した先駆的な業績として、村田雄二郎「理と力——李大釗の「平民主義」」『思想』七八六号、岩波書店、一九八八年三月。川尻文彦「マルクス主義受容以前の李大釗初探」(『愛知県立大学外国語学部 紀要』第四七号、二〇一五年)でも初歩的な分析を加えた。
- (42) 楊奎松(川尻文彦訳)「十月革命の中国五四時期社会主義思想への影響——中国における社会変革思想の改良から革命への

- 転換を中心に』『現代中国』（第九二号、日本現代中国学会、二〇一八年）一六頁。
- (43) *East-Asian Marxism and their trajectories* / edited by Joyce C. H. Liu and Viren Murthy, Abingdon: Routledge, 2017.
- (44) 磯前順一、ハリー・D・ハルトウーニアン編『マルクス主義という経験——一九三〇〜四〇年代日本の歴史学』（青木書店、二〇〇八年）、Harry Harootunian, *Mary after Marx: history and time in the expansion of capitalism*, Columbia University Press, 2015.